

〔連載〕 武蔵御嶽神社宝物シリーズ18

# 国指定 紫裾濃鍮の兜

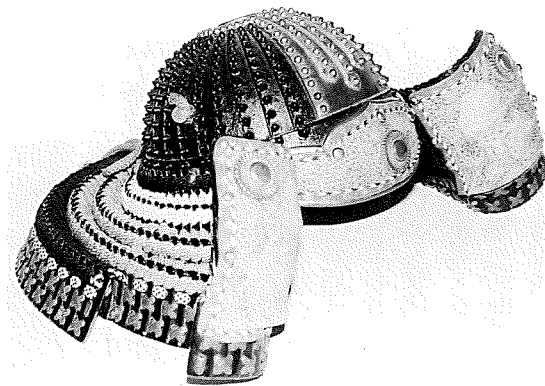
かぶと

日本風俗史学会 齋藤 慎

一

紫裾濃鍮の三十枚張二十八間二方白星兜の鉢は、鎌倉中期も早い時代の様式です。

黒漆塗りの鉢は三十枚の細長い台形の鉄板である矧板の縦の一边に「捻り返し」という細い折り返し「筋」を立て、隣の矧板の「筋」のない



〔紫裾濃鍮の兜〕三十枚張二十八間二方白の星兜鉢に腰に五段の鞆がつく。兜の緒の出る穴は左右各一孔で、巻上縁から3.5cm上にあり、当初の古い縁金物を残す

縦辺を下に重ね、「筋」に沿って一列十一枚(個)の鉄の無垢星(中空でない尖頭の釘)を打ちお碗形の鉢(ヘルメット)としたものです。この工程を「鉢を張る」「鉢を矧ぐ」といいます。捻り返しの「筋」と「筋」の間が「間」です。

一般に矧板の枚数は時代の上昇と共に多くなり、平安後期の御嶽の赤糸威の兜鉢は十四枚張十四間、それから一五〇年位後の鎌倉中期初頭の紫裾濃の鉢は矧板数三十枚です。張って行く手順は、平安後期から鎌倉前期までは、鉢の左右の両側面(真の左右から一枚分後へ寄って)の矧

板から両方へ上重ねに張って行き、正中と後正中(真正面と真後)の両方で矧板をかぶせて張り止めます。「左右両側面張(矧) 出前後張(矧) 止式」です。赤糸威の鉢では左右の各々一段へこんだ二枚の板が、紫裾濃では真後ろの一枚が張出板で、張止板と共に捻り返しがありません。

紫裾濃の鉢は後正中の張出板(後正面の一段へこんだ真中部分の板)から張り出して、前正面の板を両側左右の板の端に上重ねに張り止めます。「後張(矧) 出前後張(矧) 止式」で、鎌倉前期の終りごろ出現し、中期以後の定形になります。

いずれの方式でも正面は張止板で、後正面は張出板か張止板を中心左右対称の空間を造形、装飾意識がはたらく部分になります。紫裾濃の鉢では、正面の三枚を鍍銀(銀メッキ)の銅板(「地板」)で覆い、左右対称

となった左右の矧板の筋に地板の端をかけて包み、0.35cmの厚みを演出、左右各一列対称に並ぶ十一枚の星を鍍銀の空星(釘の尖頭が中空)と「白星」とします。この三枚は一

間に見えるので間数は二十八間になる。その中心に白星十一枚打った長い鍍金の篠垂(二重の菊座付)と左右に白星十枚の短い篠垂を配します。銀を主体にした金銀相映じた品のよい感覚です。篠垂の花先形は平安後期の名残があり、春日大社蔵梅枝金物の兜や厳島神社の浅葱綾の兜にある鍍出彫の縁取りもなくまだ古様です。正面が篠垂三

と白星二行の五筋加飾は、熊本県大王塚出土の残欠星兜や武田家旧蔵の三十二枚張二方白星兜の五条篠垂への発展過程でしょう。後正面も三間分、張出板左右の矧板の筋は平めて、左右の二枚目の筋の間に鍍銀の板をびたりと嵌込み、左右の星を鍍銀の白星とし

す。後正中の板一枚に鍍銀板を伏せただけの春日大社蔵十八枚張十八間二方白星兜(逆沢潟威)と同じ意匠で、紫裾濃がその板を左右に上げ篠垂二条でなく白星としたのは前正面の左右両端の白星の配置に対応すると共に、加飾への模索です。地板に白星の加飾は熊本県西米良出土の四方白星兜の側面に三行の白星の例があります。以上白星の足は、鉢裏で平める一本足の鉄無垢星と異なり、金銅のひらき足なのは、裏貼り韋の感触でわかり、「集古十種」も図示します。後正中の張出板に木目込まれた凹面には腰巻上から6.9cmの辺に総角付環(新補)を打ちます。銀を基調とした前後の加飾が「二方白」です。

鉢は「大円山」形で、全体に豊かなふくらみを造形しますが、前正面の幅0.85cmという細身・小型の三条の篠垂の先と地板の下辺の距離は中央は1.3cm、左右は2.6cmで鉢の球面

を強調します。一方、左右側面の各十二間の腰巻上端で矧板幅はほぼ2.2cmと等間隔に近い精緻な技術です。上下の縁を捻り返した腰巻の板を正面を除き星列下に各一点、一周二十六点の無垢星でとめ、外側幅(高)3.5cm、後正面で右を上に0.6cm重ねて合せます。鉢の前後径は23.5cm、鉢の深さは11.8cm、左右径は22.0cm、深さは12.4cmで、全体重量は4.45kgです。天辺の穴の金物は、前後径で内径3.05cm、外径3.51cmの玉縁、その筒の深さは0.8cm。正中の右側の篠垂の辺に筒の合せめが位置し、鉢裏の穴の底で折り曲げた古様の短い足は大部分折れています。次に径3.79cmの小刻と、径4.44cmの裏菊、葵葉座径7.24cmの四重構成は、比較的簡素です。しかし玉縁以下が低く沈みこみウキが全くない点はすぐれた技術です。注目すべきは、葵葉座の各葉の外縁によせて打った銀銅の三十一点の白星一周と裏菊の

間が1.5cmも空間になっていることです。葵葉座が広くて星を二重にした例は、鹿児島鶴嶺神社の二十八枚張二十間四方白星兜、和歌山淡島神社の三十枚張二十六間二方白星兜鉢にあります。あえて一重としたのは、鍍金板と鍍銀の白星の相映する効果を意図したのでしょうか。

据文も眉庇と同じでしたが、現在は左右共に新補です。全体新補の鞆は、前回述べましたが、鞆を鉢にとりつけている三本の鉢付銀の笠銀二本は古いもの、一本は古い年代の補充です。開き足を鞆の鉢付板の小札裏でひろげた菊座五重の八双銀の径1.84cmの銀は四本共古いのですが、後方二本が当初のもので、眉庇の据文と同じ精緻優雅な制作でこの兜の品格を示します。この御嶽の紫裾濃の兜は、古い鞆も具備するものとして、厳島神社の平安末期の黒糸威の十八枚張十四間二方白星兜鉢に続き、春日大社の梅金物赤糸威兜(三十二枚張十六間八方白星兜)や厳島神社の浅葱綾威兜(三十二枚張二十四間四方白星兜)の鎌倉中期の定形式と機能性、装飾性への展開を示唆する特徴をもちます。また、中央で制作された技術と品格を示す名品です。